平成８年９月１７日発行

鵠沼

久　久　比　奴　末

はまゆう　と　櫻貝　と
海光る　わが　故里

第　７　４　号

内容	鵠沼の古道「蘆花が歩いた道」	高木　和男
	郷土史研究家渋谷良之氏の「鵠沼のむかし」	高木　和男
	１９４４年の思い出	関根　久男
	昭和初期の藤沢駅周辺	鈴木　武夫
	鵠沼の古道「鵠沼本村縦貫道」の撮影記録	榛葉　照市

鵠沼を語る会

久久比奴末とは、「新編相模国風土記稿」（天保１２年・1841）で、”くくいぬま”と読みます。これが鵠沼の地名の起りです。　〔藤沢市史資料・第29集より〕

鵠沼の古道「蘆花が歩いた道」

高木　和男

高度成長期のころからリゾート開発と騒がれて列島所嫌わず開発ブームのブルトーザーが入っている。しかし鵠沼海岸は東海道線が藤沢まで開通した頃からリゾート開発が大給子爵と伊東将治とのコンビで始まった。まさにリゾート開発のはるかなる先鞭である。大給子爵はかっての大分の譜代大名で明治になってからも「帝鑑の間伺候」の華族であり、伊東将治は川越藩の武士で彰義隊の残党であると伝える。

その先鞭の地へ、その当時は文豪のひよこであったろうと思われる。徳富蘆花が数人の友達の避暑先へ訪れたのである。そこには蘆花の恋人もいたのである。そしてその紀行文を当時青年たちに支持されていた「国民新聞」の連載小説として1900年から約一年間「思い出の記」として発表したのである。

徳富家は熊本県水俣の名家で兄は徳富蘇峰である。ともに京都同志社に学び初めは共にクリスチャンであったが、兄は東京に出て「民友社」を経営し、「国民の友」「国民新聞」を初めて、初め社会主義の紹介をするほどの進歩的言論を展開して当時の青年に支持されたが、日露戦争後桂内閣を支持して後は、一貫して国粋主義、皇室中心主義思想の言論の中心となって終戦を迎えた。蘆花は終身クリスチャン的であったが、死ぬ前には「妙法蓮華経」を信じたともいわれる。晩年には蘇峰とは有名な仲の悪い兄弟であった。

当時藤沢駅は北口だけがあって南口はなかった。

百科事典を調べると「思い出の記」に出てくる蘆花の恋人は新島襄の義理の姪らしい。周囲から反対されて郷里から逃げ出し上京して兄の「民友社」に入社していた。

「思い出の記」の冒頭のところに蘆花が藤沢駅に降り立って、恋人たちに迎えられて、鵠沼の畑道を海岸まで夕日を浴びながら楽しそうに砂ぼこり蹴上げて歩いてくる情景が出てくる。この情景は満州事変前の鵠沼村の情景そのままである。

藤沢駅は蘆花が来た当時は北口しかない。南口は江ノ電ができてからのもので、それも間違いかもしれないが初めのうちは北口から踏切を渡って南へ回ったような記憶がある。

蘆花が藤沢駅に下りた時、大山参りの白装束の一団も下車した事を書いている。私はこの光景を大正８年頃に経験している。御師（おし）に引率された白装束の大山参りの帰りの一行に江ノ電に乗りあっわせたことがある。私にとっては始めてみる強烈な印象で良くはっきり覚えている。この人達は大山にお参りした後、平塚に出て汽車で藤沢に来たのである。汽車のない頃には「図」の（ＩＤＥ）を歩いて片瀬川に出て、そこから渡舟で江ノ島に行って神社に詣でて一泊して解散して江戸に帰ったものらしい。このコースは定着したもので、江ノ島の旅館も定例の行事になっていたようである。

駅の北口（Ａ）からの今の富士見町の通りはない。これは湘南中学（いまの高校）ができた翌年、遊興店が多い当時の銀座通り（Ｂ）を通学させることは風紀上好ましくなしといって大正11年に造られたものであるから、蘆花も大山詣でも銀座通りを通って左におれて一本松の踏切（Ｄ）に出た。

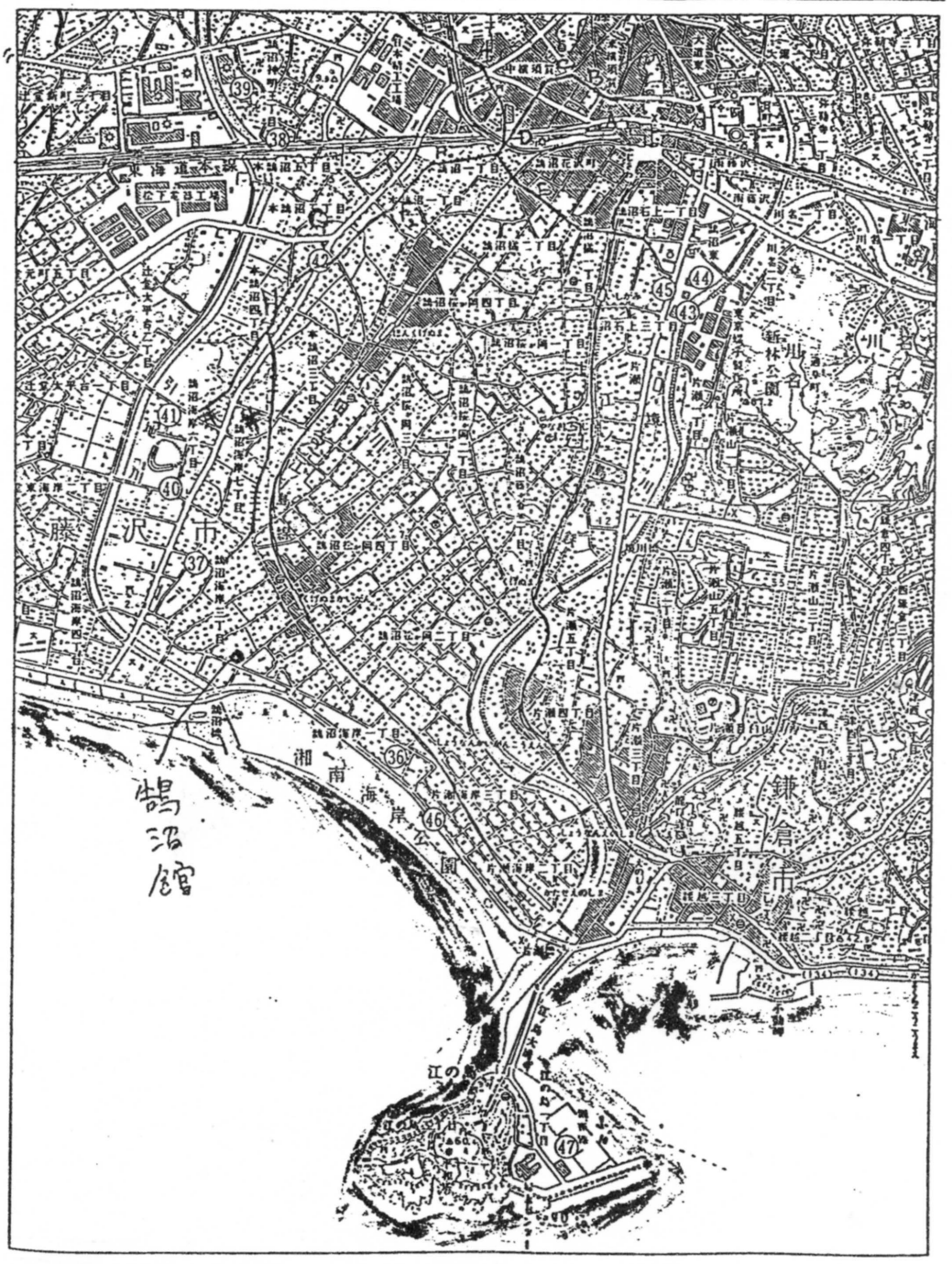
銀座通りから一本末の踏切に出る道は、今は飲食店にはさまれた狭い道として残っている、曲がり角（Ｃ）に「龍田川」の屋号のそば屋がある。この道を南に行くと１００ｍ程で広げられた道路に出て一本松の踏切に出る。ここには１０年ほど前までは一本の高い松がそびえていた。この踏切には極く最近まで西北から来る狭い道があったのだが、今度来てみるとなくなっている。この道は富士見通りが東海道道路（１号）に交差する少し前のところに工場の塀の裏に添った人も通らない裏道として残っていたが、潰されたらしい。

一本松の踏切は小田急線の跨線橋の下にある。ここは昔は鵠沼から藤沢へでる道と大山道（江ノ島への）との交差点であったのである。松は原の中の目印だったのであろう。

鵠沼へは（F_1 F_2）を通って（Ｇ）に出る。（Ｆ）の両側は今は住宅街だが、満州事件の前までは畑であった。一部に字大東の田が見られたであろうが、蘆花の記録には田は出てこない。（Ｇ）は今の藤沢警察のあるところである。蘆花の道は警察の裏側を通って南へ行く。警察の裏あたり一帯が「刈田」であり、それから（Ｈ）へと行くと「原」を経て「堀川」へ出る。「原」と「堀川」との境のＹ字路のところに「羽黒山詣」の記念碑が建っている（Ｈ）。

ここからが説が別れる。『「少しまわりだがまあちょっと寄りたまえ、鵠沼一という水があるから」と松村がいうので、僕らは右におれてまた１、２町、椿、珊瑚の雑った寒竹垣の絶え間から、とある農家の庭に入った。養蚕をすると見え屋根窓を開いた大きな農家だ。庭の一隅には、農家の風流、小さな花壇に桔梗、ビロウド草、鹿子草、鳳仙花などが咲いている。左手の納屋のはたには３、４羽の鶏が乾麦をほじくり、右手の欅の枝から枝へ海浴衣、手拭などが乾してある。縁側に立って、石川（村松の親類）の細君に挨拶していると、お敏君が手早くそのいわゆる鵠沼一の水に、白糖を和し橙皮油を落として持ってきた。ああその水！今思ってもじつに慄いつくほど。ただ僕はその香を聞くと夢のような気になって・・・・・@』と鵠沼一の水のある農家の描写が書かれているが、この農家が問題である。ぼくらは右におれてというところを羽黒山の碑で右に道をとれば、鵠沼一の水のある農家は「葉山家」になる。羽黒山の碑から100mばかり南へ下がって右に曲がれば「浅場家」になる。ここはこの辺りで陸軍の秋期大演習があった時、御野立ち所に水を献上した井戸があったというしどちらともわからない。井戸は現在は両方ともない。浅場家の方は家もない分譲されてしまっている。

井戸はどちらでも大局には差しさわりはない。要は明治の初期、東海道線が開通すると同時に「レゾート地鵠沼」が当時の世論をリードしていた大新聞に紹介されていたということである。「思い出の記」にはまだ「鵠沼館」は出てこないが、間もなく建てられたのであろうと思われるので、図にはその位置を入れておいた。


鵠沼館
湘南海岸公園
藤沢市
鎌倉市
江の島

郷土史研究家渡谷良之氏の「鵠沼のむかし」

（高木　和男）

みなさん初めての方で、榛葉さんは先代のころから存じているのですが、鵠沼のことは有田さん投稿している「鵠沼」に良く出ています。鵠沼小学校の飯田義治副校長なども存じ上げています。また地名の会にも関係しております。

最近私どもが困ることは地名の変更があったことで、そのため今はわからなくなりました。昔の地名と番地は明治５年の地租改正の時にできたもので、これまで税金は物納でしたがこれ以後金納に改正されて農民は物価の上昇に悩まされました。明治９年にすべての土地所有者に（壬申 M5 ）「地券」が渡されました。

この時鵠沼の小字と地番が決まって引地を１番地として下藤ケ谷を最後としてほぼ7000番までありました。小字（こあざ）は２９ありました。また小字は１０の「大字」にまとめられていた。このうちの９つが伊勢神宮の山車を作りました。

鵠沼海岸には「山崎由（よし）」さんという人がいて「天きん」の裏に住んでいました。この人は東京から移ってきたらしいのですが、別荘から出るゴミを集めていました。そのころ鵠沼海岸はカヤがいたるところ茂っていて、きつねが出ました。この人は昭和１０年ごろまでゴミの収集をやっていました。

この辺りは当時鵠沼海岸東部（今の松が岡の北部）といっていて、江ノ電の鵠沼駅に近かったため、東京からの移住者が多かったが、大部分は松林でした。この辺りに石森章太郎さんと同居して小森和子さんがいました。轟さんの邸宅の裏に当たるところでした。

四つ角のところに植文さん（大出）がいました。別荘の庭の手入れの仕事があるので、植木屋さんが多かった。「植定」「植虎（渡辺）」「植藤」｛渡辺音次郎」「植高」などがいました。

江ノ電の鵠沼駅から大曲に来る途中に「藤ケ谷橋」というコンクリートの小さな橋が架かっていて、木下さんのうち（今の松が丘２丁目７番地当たり）の大きな沼池からの水を片瀬川に流していました。藤ケ谷橋の北に（井上政良方となり）駐在所があって（震災

後）波多越という巡査が駐在していました。

大曲りの四角あたりに沼間敏郎、長谷川巳之吉、嵯峨みち子、その先に小田柿別荘がありまして、この道が片瀬へ抜ける唯一の道路でした。その先の片瀬は山本百太郎という人が松を植えて開発したところで、山本橋を掛けました。　浅い井戸は塩水が出るので深く掘ったら、ラジュームが出て温泉を作っていました。奥さんは金沢の素封家の出だそうです。

鵠沼海岸には有田さん、関根スレート屋さん、関根畳屋さん、斉藤ライオン堂（薬種商）などがありました。

昭和の初めごろに一木通りができました。この辺りは以前は沼地でした。また藤沢から高瀬通り（高瀬弥一）、高松（林之助）通り、宮崎（寛愛）通り、熊倉通り、がつながりました。畑にもならない砂地を住宅地として開発しようとしたものです。松島苑（山口通り）などです。

今の江ノ電石上は当時は高砂（たかすな）といいました、砂地で何の役にも立たない荒れ地でした。今の蓮池あたりは片瀬分が深く入り込んでいた土地（400 番台の番地）で（片瀬川が深く蛇行していたため）昭和３１年に藤沢に編入されたのです。川袋の東京螺子あたりの鈴木家の先から片瀬行きの（江ノ島）船が出ていました。

東京螺子の社長松本さんは今の松が岡３丁目２０番地のあたりに住んでいて「無人荘」といっていました。邸内に松本さんの他に雨宮、大沼; 笠原さんがいました。金沢末吉さんという丸善の社長が来住し東屋に泊まりました。

昭和１４年頃海岸に「鉄道省海の家」があり（昭和６年開設）。

海岸の砂浜に沿って下鰯という小字があった。片瀬よりから辻堂まで細長く続いてすべて５２１８番地になっていた。片瀬にも同じようなところがあって西浜はすべて２９３１番地でした。

東家の前は鵠沼館で吉村別邸はその跡に建った。主人は吉村鉄之助で衆議院議員でした。震災のあった年、東久迩宮の妃殿下と王子が避暑に来ていたが、震災で一人（第３王

子）はなくなられて他の方は警防団の前沢清さんが助け出したので宮家から感謝状をいただいた。

一木通りは５丁目まで津波が来た。小田急はまだない。　海岸の町は有田さんの通りまで来た（魚が泳ぎ回る）。東側では郵便局のところまで来た。引地川を遡った津波は作橋を過ぎ太平橋のところで掘川の八部の田んぼに溢れて、実りかけた稲はすべて枯れてしまった。

郵便局は昭和１９年に４局が合併した。それまで別れていた電話がすべて藤沢局になったが、加入電話は１０００台に達しなかった。鵠沼郵便局の初代局長は浅場金八で２代目は榛葉さんでした（その後柿沢、今泉と続いた）。

合併前の鵠沼郵便局の電話加入者は５０台ばかりでした。藤沢までは電信で電報が来ましたが、鵠沼局へは電話で来ました。「イロハノイ」「アサヒノア」というやり方です。配達は徒歩です。自転車は昭和になってからです。藤沢では大正１３年からでした。

お稲荷さんは各部落に祭ってあるので、その土地または家の名をつけて呼んでいました。昭和１０年頃に誰かがお稲荷さん誘致を計画して、大きな社殿が建前されたが資金が続かず建ち腐されになった。その後これとは別に高山さんが伏見稲荷社と稲荷講社を造るため（有田金八さんの尽力による）昭和１８年に京都から東海道線での御霊を持って来た。熊倉通りのものとは別である。戦時中に近衛秀麿の大政翼賛会との関係で衆議院議員の「みそぎ」道場をしていた。寒中の寒い時にフンドシ一枚で引地川のドンドン板橋を渡って海に入っていた。それてこの稲荷を高山稲荷といっていたがいつの間にか伏見稲荷になりました。

（筆者紹介　渋谷さんは今の大和市当時の渋谷村の旧家の出であるときく。大震災の後のころから鵠沼郵便局に長く勤めておられた。そのため地番、居住者に詳しいい。なお長谷川巳之吉は「大地」（エドガー・スノー？）の出版でおお当てした第一書房の社長である。

次に挙げるものは渋谷さんが思い出すままに書き出して下さった当時の鵠沼海岸に住んでいた人達の名前である。知名人が多く住んでいたことがわかる。

中藤ケ谷

我妻　林　達夫　加田哲二　仰木仁五　佐藤　渚　中根　織田原

武藤別荘　徳力別荘　栃内　外岡ツル・カメ　三越クラブ　三輪梅三郎　井祐鶴

及部勇

上藤ケ谷

中原工務店　山上米店　桂　隈川基　森本次郎　後藤覚司　三輪徳実　沢井仁一郎

玉井義助　赤木圭一郎　轟勇二医院、貞二

下藤ケ谷

芳藤園、佐藤　服部盛　世良禎元　馬越恭平　井上政良　波多越巡査　野辺実、音次郎

菊本別荘　大類伸　沼間敏郎　小田柿別荘　磯崎功　寺門正　野尻　相馬孝太郎

広田弘毅　長谷川巳之吉　嵯峨ミチ子　長谷川一夫

下岡

永井潜　大類伸　疋田盛雄　鬼頭　佃別荘　清水林造　大出文造　八幡太郎

渡辺慶二郎　山崎由　左分利信　小森和子　石森章太郎　土岐松男　横井美代子

矢沼喜八郎　内藤千代　富士山（医師）　島田イシ（産婆）　唐木田武夫（作家）

布施留八（酒屋）　井上靖（作家）　斉藤秀　益田別荘　関根善太郎（皮商）　福富

広岡助二郎　今井達夫　渡辺定吉（植木屋）　小林養鶏場　川口省吾（ハーモニカ）

無人荘（大沼　笠原　西宮）

中岡

太田勇之助　茂木　鞍智　金沢庸治（美術）　広瀬　黒川　丸山　木村

渡辺恵二　佐野別荘　邦枝完治（作家）　子母沢寛（梅谷松太郎）　一木与十郎

村川堅太郎　宇野浩二　田中直掛

海岸　小田急駅海側

高木和男　久松伯爵　宮田政之助　内藤　　後藤タマ　後藤勇夫　森茂樹　千田

長谷川欽一（東家）　福田良平（医師）　矢折（八百屋）　有田金八　植籐　大村

大達淳一　長谷川酪可　村上慶二郎（東家板前）　松井五郎　村瀬章子（女優）

伊東縫子（鵠沼ホテル）　穴山別荘　志村欽之助（政治家）　前川清　川崎タメ　遊佐

矢島松五郎　関根スレート　関根畳屋　八百徳（番場）　中野一郎　中屋（田中耕太郎）

佐々木しんや（電球）　田辺政吉

海岸通り海側

大徳（加藤）　小此木彦三郎（政治家）　魚勝　山口屋　柴田タケ　西村文利

三浦清風（医師）　中島彦太郎　五十川　　中沢そう平　中西勉平　鎌倉屋（斉藤）

片山トク　高山昇　田中耕太郎　海浜閣（渡辺定吉）　トキワ食堂　宝屋（斉藤）

ライオン堂（斉藤）　山上　番場定八　三浦医院（一木）　松浦（一木）　山崎定一

山口紋吉　松岡静雄　武藤能隣　荒井袈裟夫　安場（関根ヤス　土木）　藤吉雫

川袋

高梨耕平　斉藤清太郎　山越一郎　安藤寛（作家）　大島二郎　小泉多計（女優）

田中隆一　上郎幸二　高瀬弥一　宮崎寛愛　中村善之助　香田五郎　祝宮静（国大教授）

十時計　安部政二郎　和光寮（秩父宮）　浅見しん造

１９４４年の思い出

関根　久男

時は、昭和19年 3月私のいた中国山西省西部は、内蒙古に接した内陸で、一面に広がる黄土高原のトルファンによる黄塵、強い風の日が続くと空は、茶褐色に染まる。乾いた空気と低い気温の土地であった。

皆「ゴホン、ゴホン」と咳をしながら営外を行進する。靴が隠れるほどの黄塵が積もっているからだ。

また、この下は、１メートル近くも凍っているという。

このような環境の中、通信技術を習得するため毎日のように、粗末な机と椅子が並べられた聯隊本部の講堂に通った。通信兵は、歩兵と比べ戦闘訓練が少ない。「通信兵が、兵隊ならば、電信柱に花が咲く」と中野陸軍学校出の鬼軍曹に鍛えられた。

送電も手首が固いので、なかなか軽くキーが打てない。百字キーを叩いても、二十字近く間違ったり抜かしたりした。班長当番に当たったときなど、毎日零下15度以下の中で、洗濯を沢山する。そのため、手崩れを起こして、電鍵が思うように字になってくれなかった。受信も、人一倍、進歩が遅かった。

数字受信、暗記受信は、よく、「今日は天気が良い」等の言葉を受信させ、出来た者から内務班に戻す。いつも一人残され、制裁を受け、断腸の思いだった。

夜の点呼の時、班長から「関根二等兵は機関兵に移れ」と命令を受けた。明日からは、送信機、受信機　、暗号書の扱い方、電報の整理配達、敵に奇襲を受けたときに焼却する方法、更に、敵が接近してきたら羊のように食べる要領を覚える。（物を）口に入れたが、喉を通らない。鬼軍曹に無理矢理、喉を通過させられ、といもつらかった。

「白兵戦」になつたら、その状況を軍司令部に打電し指示を受け、絶対、捕虜にならないこと、機材等を全部破壊し、玉砕するか、手榴弾で自決していくことを義

務づけられ。通信兵の任務の重さと、二等兵の命の軽さを身に染みて感じた。

歩兵を見習えと、朝四時起床、夜は、二十二時まで演習の特訓が続いた。

夕食に内務班へ戻ると、古年兵殿　から近く大作戦が展開されるため、初年兵も教育を打切り戦場へ出発する。近日中に、中隊長殿から呼び出しがあるだろうから、いつでも前線へ出動出来る準備をしておけ、と指示された。「はい」と答えたが唖然とした。

二、三日過ぎた朝の点呼の時、豊田班長殿（伍長）から「関根二等兵は、本日午前九時に中隊事務室へ出頭せよ」と指示を受けた。点呼が終わると、暗い雰囲気での朝食後、あと片付け。　初年兵同志、小声で、「関根、今日は、先に戦地へ行く命令だぞ。体に気を付けろな」「関根、中隊長殿に呼び出されているから、前線への出動命令だよ」「今度の日曜日に、太原市内へ営外外出ができれば会食ができるんだけどな」と、仲間の会話を楽しんだ。

出動準備をし、九時前に内務班を後にした。中隊事務室で出頭申告をして、緊張しているところへ各班から初年兵が入室してくる。待つこと十五分、一同、直立不動のままでいると、堀井中隊長殿（中尉）が、威厳を保って入室してきた。

中隊事務室勤務の軍曹が「一同、敬礼」と、声をかける。

「関根二等兵」と中隊長殿に呼ばれ、「はい」と答えた。「〇〇小隊長の指揮下に入り、”ア号作戦”の先遣隊として、出動せよ。（西北河南作戦）」「はい」と答えを復唱し、中隊長殿に敬礼し退室した。

内務班長殿に先程の報告、班長殿より前線へ出動準備せよ、と指示を受ける。完全軍装の支度（世帯道具、実包、手榴弾等）から始まり、言われるままに支度をした。永遠の別れとなるかのように、爪を切れ、頭髪をバリカンで刈れ、と細かく指示される。

すべて、袋に入れて、貴重品とともに、提出した。

今日は、日曜日である。

明星の瞬く営外の野原で、東の空に黒くそびえるラマ塔の二つの影を見つめ、朝食の支度をしながら、「外出は、無理か」と、ひとり嘆いた。　　1993年 2月

昭和１９年春

関根　久男

「新兵さんは可愛想だねー。また、寝て泣くのかよー」

中国山西省太原市城外に、日本陸軍乙第三五〇六部隊（電信第九連隊）本部前の六角台から消灯ラッパの音が営庭一ばいに流れて来る二十時。

間もなく、「初年兵業間集合」の声がかかる。雑嚢（のう）に電鍵と受話器、無線技術書等を入れて中隊事務所前に集合する。教育助手の岡本上等兵殿に引率されて通信講堂に向かう。通信講堂には明か明かと電気がついて眩しい位。中には助教の鬼軍曹が黒板の前に立っている。「上肢」「下肢」「元肢」何回も繰り返し電鍵の操作を続ける。

次の教育は「モールス」の暗記である。「伊藤」「路上歩行」「ハーモニカ」、仲なか覚えられるものではない。

イ　・－	カ　・－・・	オ　・－・・
ロ　・－・－	ヨ　－－	ク　・・・－
ハ　－・・・	タ　－・	ヤ　・－－
ニ　－・－・	レ　－－－	マ　－・・－
ホ　－・・	ソ　－－－・	ケ　－・－－
ヘ　・	ツ　・－－・・	フ　－－・・
ト　・・－・・	ネ　－－・－	コ　－－－－
チ　・・－・	ナ　・－・	エ　－・－－－
リ　－－・	ラ　・・・	テ　・－・－－
ヌ　・・・・	ム　－	ア　－－・－－

ル	ー・ーー・	ウ	・・ー	サ	ー・ー・ー
ヲ	・ーーー	ヰ	・ー・・ー	キ	ー・ー・・
ワ	ー・ー	ノ	・・ーー	ユ	ー・・・ーー
				メ	ー・・・ー
・	・・	終り	・・・ー・ー	ミ	・・ー・ー
。	・・ーー・	最終	・・・ー・ー	シ	ーー・ー・
(	ー・ーー・ー	訂正	・・・・・・・・	エ	・ーー・・
)	・ー・・ー・	以下略数字		ヒ	ーー・・ー
1	・ーーーー	1	ー・	モ	ー・・ー・
2	・・ーーー	2	ーー・・	セ	・ーーー・
3	・・・ーー	3	・・・	ス	ーーー・ー
4	・・・・ー	4	ーー	ン	・ー・ー・
5	・・・・・	5	・ー		・ー・ー・・
6	ー・・・・	6	ー		
7	ーー・・・	7	・ー・		
8	ーーー・・	8	・ーー		
9	ーーーー・	9	・・・ー		
0	ーーーーー	0	ーーー		

兵隊にくる前は日本精工藤沢工場の職工の身で、「通信」とは無縁の労働者であった。

鬼軍曹が動けないほど「鉄拳、木銃」で叩いて歩く。何回もやり直しをさせられているところに、電気が二、三回点滅する。二次消灯である。鬼軍曹の「本日の業間はこれで終わる」の声に、通信講堂より営庭に出る。歩哨は見張りをしている。何処かで支那馬が、哀愁を思わせるような声で啼いて居る。

春とはいえ、二月の気温は零下二十度。地面は氷ついており、助手に引率されて滑らないように、駆け足で内務はん（起居の場）に戻り、古年兵の目を覚まさないように布団に潜り込む。

朝からの重労働でくたくたに疲れたのに加え、あの、「鬼軍曹の体罰」と「初年兵教育」がこれから六ケ月間続く。野蛮な私的制裁により、夜遅く迄こっぴどくしぼられ、「ビンタ」を数回喰らって歯はぐらぐら、体に痛みが走る。感情を押しこらえ唾をぐっと呑んでいる状態だ。音は出せない。涙を浮かべながら、私的制裁は、「教育」と「指導」の美名のもとで、弱い初年兵を精神的に、肉体的に追いつめていく。初年兵教育終了時には、一割前後責め苦に打ち勝つことができないで、自殺したり、負傷したりして、陸軍病院へ入院する。

矛先が向いてくる。餌食にされないように、「軍隊要領」を使うことを覚えないと、生きて故郷へ帰ることはできないことを悟り、数多くの、尊い生命を犠牲にする皇軍（天皇の軍隊）の戦略戦術に恐れをなし、そして失望した。青春をもぎ取られた無念さで全身の力が抜けたようになり、眠りについた。

ところが、寝入り端の夢を叩き破られ、不寝番兵が「非常呼集」と、知らせてくる。目をさますと、ラッパが鳴っている。古年兵は、ラッパの鳴る音で、演習完全軍装し、営庭に集合、とわかる。

「初年兵、完全軍装をして営庭へ集合」とだれかが小声で言う。真暗闇の中、敵襲の緊急事態に対処する初動である。声を出すことも禁じられ、しかも出来る限り敏捷に行動しなければならなかった。暗闇の中の手さぐり軍装競争だ。

我先にと軍装して営庭へとび出して軍装検査を受けるが、雑嚢が逆さまに吊してあつたり、巻いた筈の巻脚絆がずり落ちていたりして、軍装の再点検とビンタをもらいながら整列した。

非常呼集を「命令」した榎本中尉週番指令殿が訓示する。

非常呼集の目的は、志気の高揚不撓不屈の精神、体力の増強実戦訓練など絶対服

従の精神を培い、「命令」通りに行動し軍規を身を以って体験することになっている。実戦を経験していないと初年兵はこの辛苦を耐え抜けられなければ、これからの戦闘を戦い抜くことが出来ない。「いまから太原神社に向けて行動を開始する」各中隊別に「出発」と大声でいった。背中に十五キロのはいのう（生活必需品の入ったリュクサック）をしょつての真夜中の行軍。

乙三五〇六部隊は、軍靴を踏み鳴らし、衛兵所前を出門して、堂々の行進を開始した時は、午前二時を指していた。

終わり

昭和初期の藤沢駅周辺

鈴木　武夫

図面上の（折り込みの図参照）藤沢駅が開設されたのは、国鉄の横浜と国府津が開通した明治20年 7月でした。その時は国鉄の新橋と横浜が通じてから丁度15年になりました。その当時列車は 1日 4往復で乗客の数は、 1日当たり 500人前後の様でした。そして藤沢と新橋間の所要時間は大体 2時間近く要したそうです。

次に江の島電気鉄道が明治35年に、片瀬江の島近くまで開通し、明治43年に鎌倉市まで通じました。次に小田急電鉄が江の島まで、新宿から開通しました。

藤沢駅の北口には、常時10台前後の人力車が客待ちしており、50銭前後の代金で江の島、鵠沼海岸まで送迎しておりました。その後藤沢自動車が出来、タクシーもだんだんと増加してきました。

昭和 4年頃の藤沢の町長は金子角之助氏でした。人口は22.000人（昭和 3年 6月）で戸数は 4.500人の様でした。この頃から藤沢本町の宿場町の商店街、白旗横町の問屋街の賑やかさがだんだんと藤沢駅周辺や銀座通りの商店街に移ってきた様でした。しかも、小田急線が完成し運転を始めましたので、江の電線と共に交通の便が良くなり、藤沢駅を真ん中にして、北口・南口ともにたいへん人出が多くなりました。その人出につれて駅近くもいろいろな商店ができました。先ず駅北口広場の東、遊行通りに面して稲毛屋旅館があって、広間も多く、 200人近い客が一度に宴会も出来るようでした。一方、駅正面の角若松料亭も明治の中頃に開店、これも 200人前後の客を収容でき、宴会や結婚式をやつていました。その後角若松は現在中華料理店で続けています。その他北口の近くには、桃花亭、仲若、三笠亭等の料亭があって、藤沢駅の汽車待ちの人や、江の島旅行の休憩場所になっていました。しかし、現在では総てありません。

次に、当時から駅近くの商店で現在まで営業されている店は、北口では、近江堂和菓子店、中島薬局、釜七金物店、佐藤米店等です。南口には図面と多少場所が変

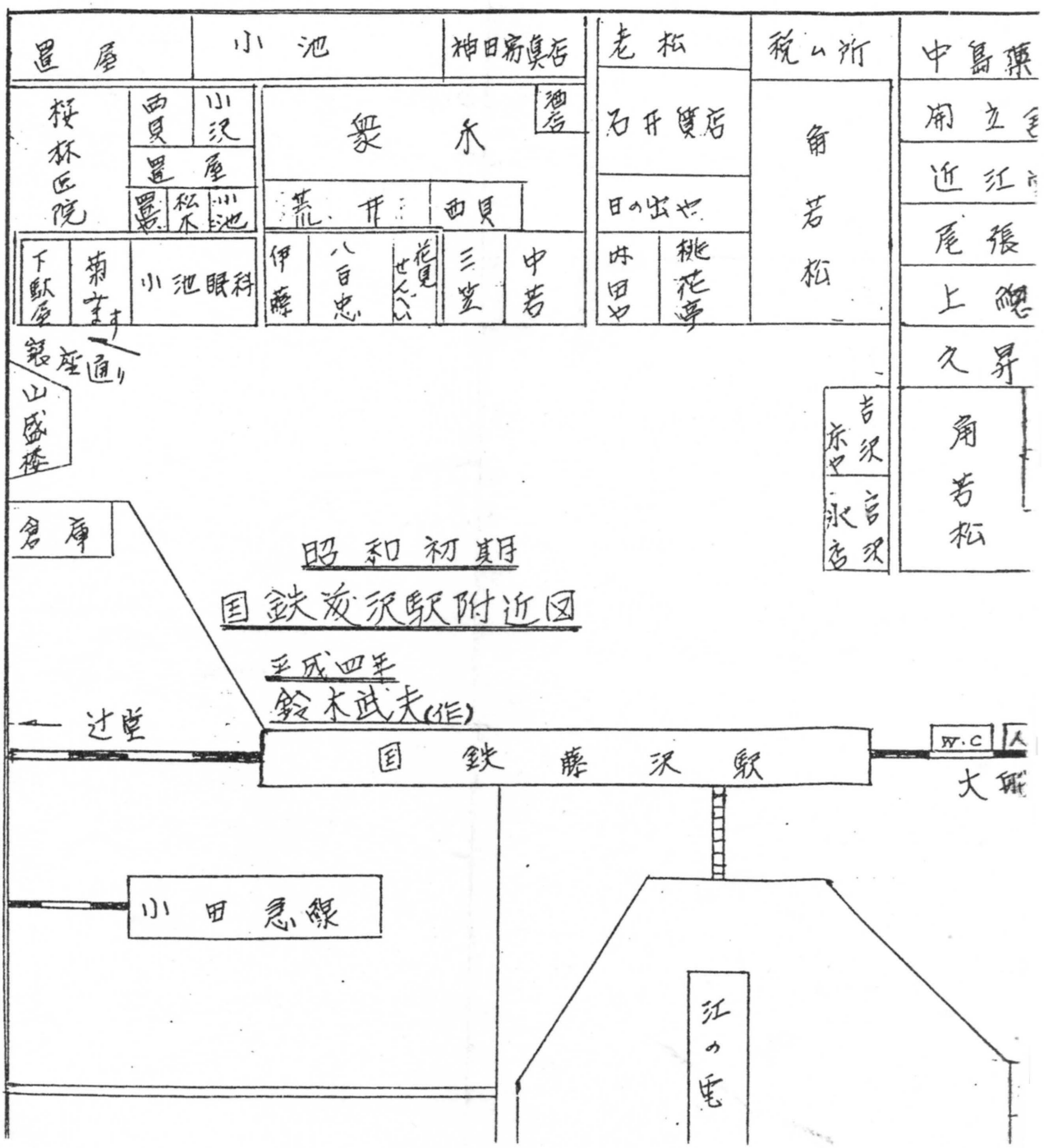
わりますが、立花茶店、斉藤床屋、中村自転車店等がありました。

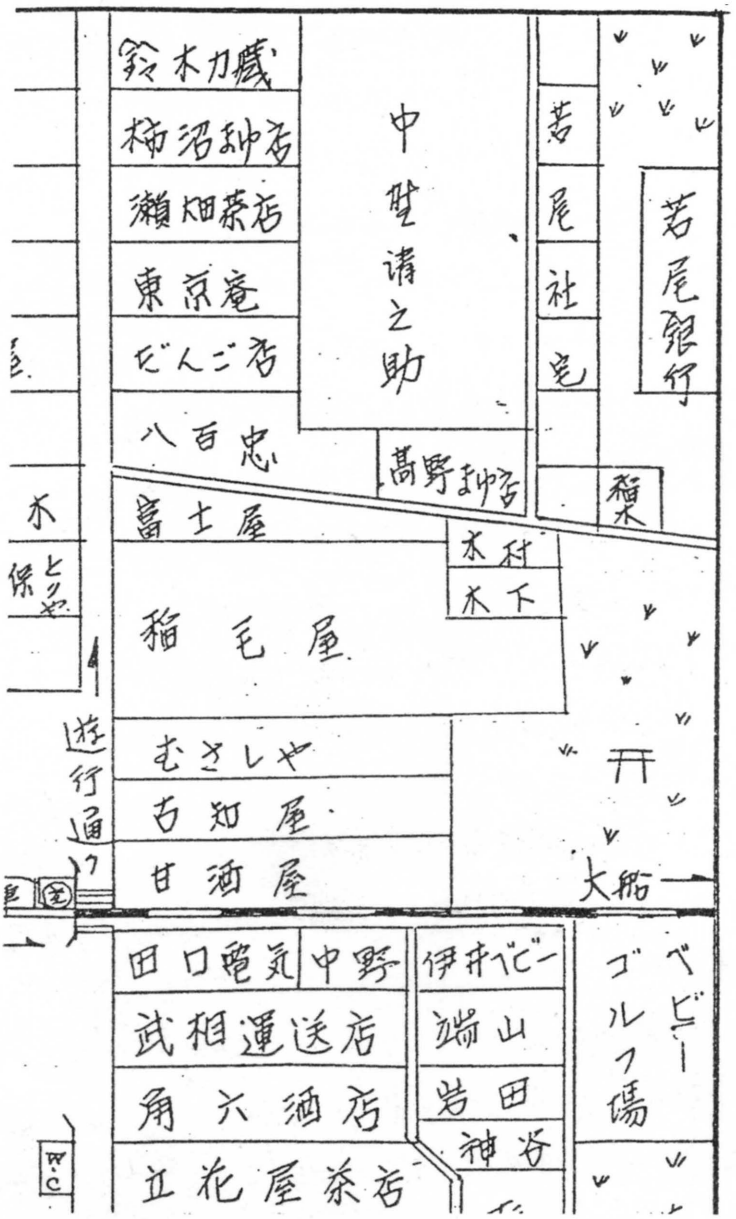
昭和の頃に北口商店街と南口商店街を結ぶ大きな踏切がありました。時間によって10分～　20分も交通止めになるので、大変で人々の話題になりました。中にはくぐって歩いて行く人もおりました。

以上私が住居していました藤沢駅近くの見聞で知ったものでした。その他昭和初期の頃の図面を調査し、又いろいろな人様の図書を拝見いたし、参考に当時の藤沢駅付近を説明させて頂きました。

大変に粗末なものですがよろしく。

以上


畳屋
小池
神田写真店
老松
税ム所
中島薬
桜林医院
西貝
小沢
畳屋
畳
松木
小池
絮木
酒店
荒井
西貝
石井貸店
日の出や
角若松
角立
近江
尾張
上総
久昇
下駄屋
菊すま
小池眼科
伊藤
八百忠
花見せんべい
三笠
中若
味田や
桃花亭
寝座通り
山盛楼
吉沢
京や
吉沢
永吉
角若松
倉庫
昭和初期
国鉄藤沢駅附近図
平成四年
鈴木武夫(作)
辻堂
国鉄藤沢駅
W.C
大船
小田急線
江の電


鈴木力蔵
柿沼鮮魚
瀬畑茶店
東京竜
だんご店
八百忠
中野清之助
高野鮮魚
若尾
社宅
若尾銀行
稲木
富士屋
木村
木下
稲毛屋
むさしや
古知屋
甘酒屋
大船
田口電気
中野
伊井ベビー
武相運送店
端山
角六酒店
岩田
神谷
立花屋茶店
ベビーゴルフ場
W.C

鵠沼古道「鵠沼本村縦貫道」の撮影記録て

榛葉　昭市
林　　三郎

6月の梅雨入りになって、この日（6/5 ）「語る会」で予定した”蘆花の道”を辿る日であったが、生憎朝のうち小雨のため中止になった。しかし、日中に晴れ間が見えたので、ついでといっては気がひけるが、同じ本村展示担当の林さんと二人で、連れ立って、写真機携帯で歩くことに決めました。

鵠沼本村の縦貫道とも言うべき、鵠沼旧地番でいう一番地のある引地町内から上村 —— 宮の前（皇大神宮のある町内）の「一の鳥居」を経て宿庭町内の「法照寺」（観音さま）に辿る道の石塔などの撮影に入りました。ここは幟四町内と言われる所で、皇大神宮祭礼の8月17日に、幟旗を参道に立てる役目を持つ町内です。

まず、皇大神宮の一の鳥居横に大きく立てられた道祖神塔を撮り、ひとまず宮の前の史跡である「金掘塚の首塚」の碑を撮りました。所謂実地検証と言う意味です。

次に此処から北に向かう古道は鵠沼から辻堂・羽鳥方面の向かう旧東海道を通って大山道へと繋がる道です。これがあるので 100メートルほど北へ向かい、満福寺内裏口迄やってくると、古びた庚申塔二基が、一段と高い場所に据えられています。此処などはいかにも古道といった雰囲気をもっています。ここを撮影し、再び法照寺からＪＲ踏切を渡り、普門寺さんの山門前へ出ると刈田町内に入ります。この道は鵠沼の海に続く幹道で、その昔、雨乞いの行事があると、皇大神宮からこの道を海岸へと練り歩いた道なのです。刈田町内の入口近くで、東へ向かう三叉路に刈田の双体道祖神が、ふたっの宝塔に挟まれて立派に祀られています。

これより南に三丁で蘆花の歩いた道と合流する所に、原町内の道祖神大小二基があります。鵠沼の古道と言えば、必ず海へ向かう道で、鵠沼村が半農半漁の村で暮らしを支えていた昔は、村の鎮守様が（皇大神宮）が村の北部に在り（上村即ち神村）、南部の堀川・納屋へと地引網の漁に毎日通う道でした。今でも原町内の道すじ

に、昔から永々と地引網の漁に励んでおられる鵠沼唯一の網元、葉山さん（堀川網）が健在であることを記録し、鵠沼の古道の撮影を終了しました。

次の頁に、撮影箇所と写真を地図とともに掲げます。コピーにより写真は不鮮明になりますが、ご了承いただきます。

〔追記〕

原の辻（道祖神）の内容で、少々余談になりますが、この辻にいつの時代に建てられたか？聞き正すすべが無いが、この道祖神と並んで現代の道しるべでしょう、コンクリートの角柱が有ります。私の50年前の記憶では、1.5 メートルのこの角柱の一面に「東本鵠沼駅に至る三丁」と書かれていたと思います。急ぎ復元したいと思いますが、交通量の多いこの地点では、いつまた破損される運命にあるかと思いわずらい、地主の関根さんに相談して、関根さんの納屋の角に避難させました。
地元の長老から内容を聞き取り、事情を確認して後、出来れば表示し直して、元の位置に残したく思っています。

おわり

地図と主な撮影場所

① 道陸神（道祖神塔） ② 庚申塔（満福寺裏口）

③ 法照寺（絵馬）#．写真は内部のご本尊 ④ 普門寺

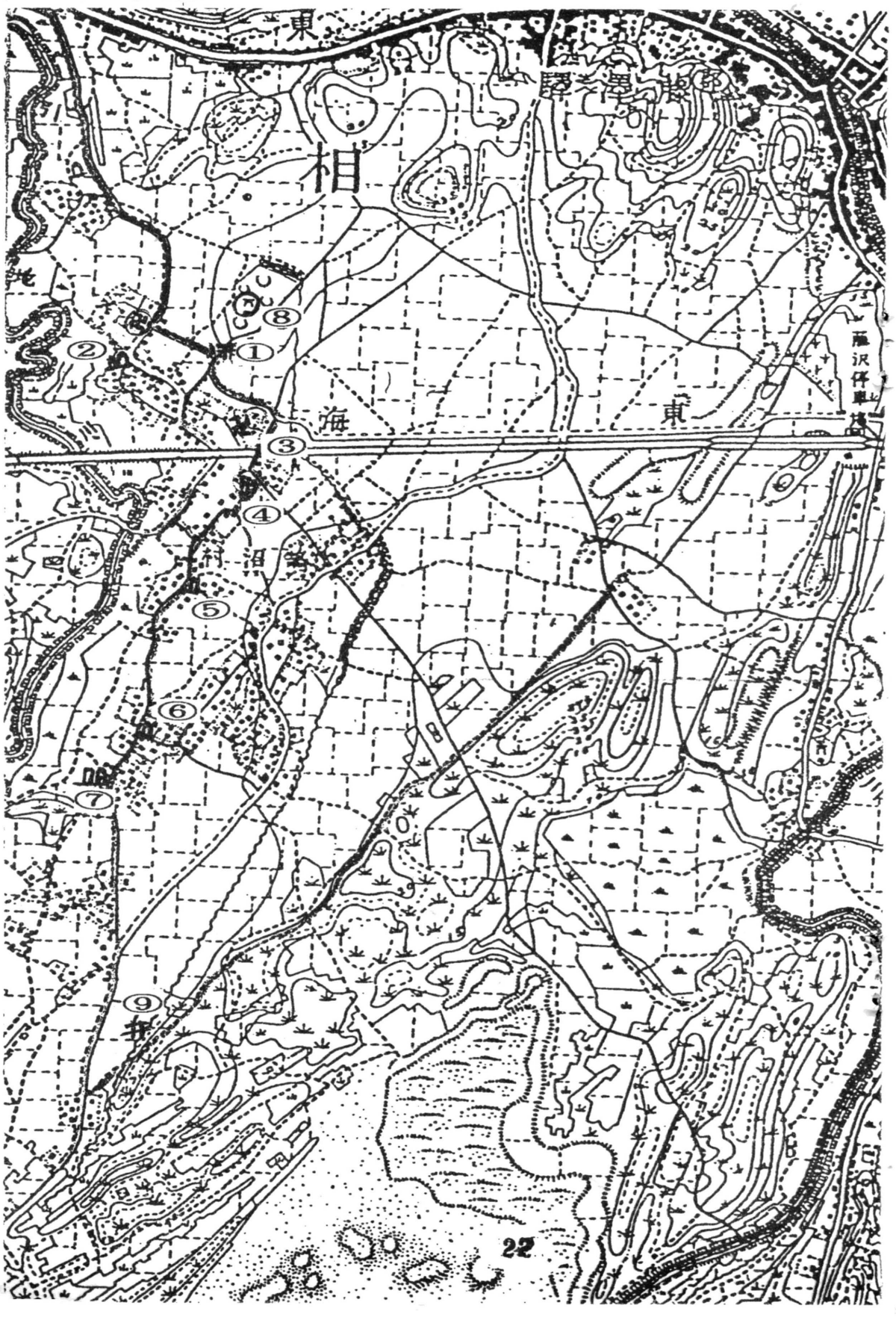
⑤ 道祖神（刈田の辻） ⑥ 道祖神（原の辻・写真は１月14日斉との日）

⑦ 原・出羽三山（月山、湯殿山、羽黒山）羽黒山講の碑

⑧ 皇大神宮 ⑨ 新田宮

参考・湘南堀川網

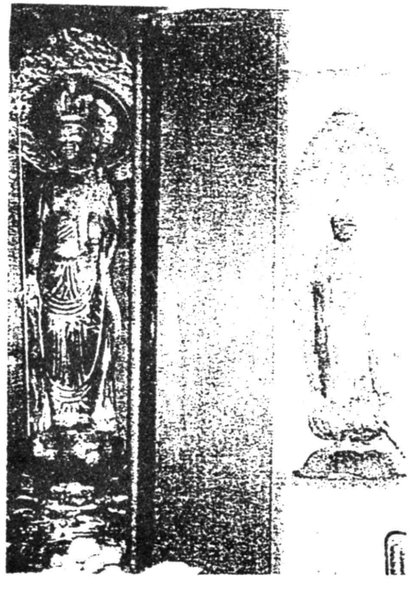
なお、機関誌掲載の写真は、必ずしも当日のものとは限りません。


東
相
海
東
藤沢停車場
村沼
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
22

2.

1.

6.

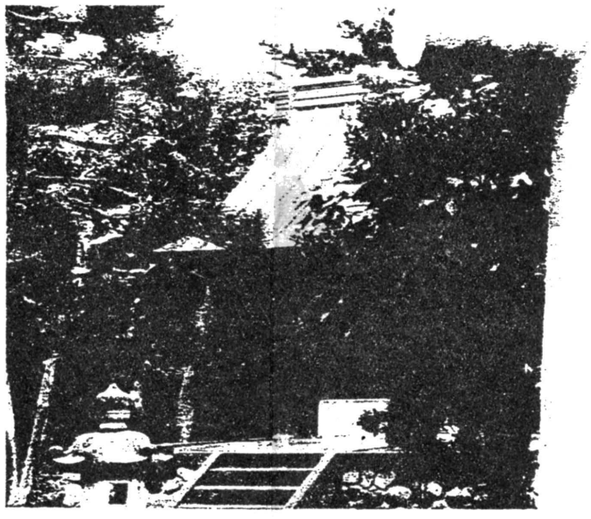


3

8.

堀川 綱

7.



9.

「鵠沼」第７４号
平成８年９月17日発行

1. 鵠沼の古道「蘆花が歩いた道」
2. 郷土史研究家渋谷良之氏の「鵠沼のむかし」
3. １９４４年の春、ほか一編
4. 昭和初期の藤沢駅周辺
5. 鵠沼の古道「鵠沼本村縦貫道」の撮影記録

ご注意：本誌（機関誌）の文章を引用するときは、必ず出典を明記して下さい

編集・発行　鵠沼を語る会
鵠沼公民館

電話 33-2001
藤沢市鵠沼海岸 2-10-34